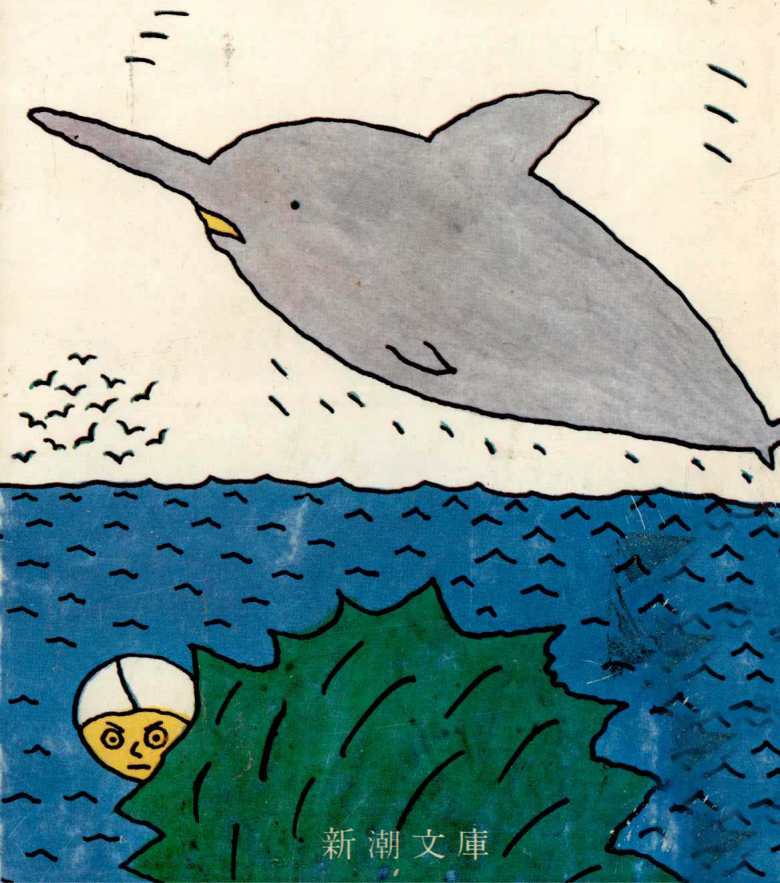


船乗りクプクプの冒険

北 杜 夫



新潮文庫



ふた 船乗りクラブの冒険 ぼうけん

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 131 E

昭和四十六年三月二十五日 発行
昭和五十二年九月二十日 十五刷

著 者 北 杜 夫^{キタ・ツグオ}

発 行 者 佐 藤 亮 一^{サトウ・ヒロ}

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替いたします。

新潮文庫

船乗りクプクプの冒険

北 杜 夫 著

潮 社 版

船乗りクブクの冒険

クブクブとは何者か？

諸君のうちで宿題の好きな人がいるだろうか。日本でもイギリスでもポルトガルでも中国でも、宿題というものはだれもがきらいだ。どんな偉い人でも、科学者でも、市長さんでも、校長先生でも、やっぱり宿題は好きでなかった。

それでも宿題というものはやらなければならない。

それだからタローは宿題をやっていた。どんな宿題かというと、算術、算数、数学とかいわれるもので、できがわるい子どもはみんなこれが苦手なのだ。そして、むろんのことタローはできがよいほうではなかった。

彼はブツブツひとりごとをいっていた。

「ええと、十八と五をたすと……二十七と……それを三で割ると……これは八だ。おかしいぞ。妙だぞ。ふしぎだぞ。ヘンチクリンだぞ。こんなふうにスラスラとけてしまうはずがないわけだがないあ」

彼は二、三度頭をたたいてからつぶやいた。

「この答えがあっているかあっていないかを、ひとつ確かめてみよう。それにはこれを逆にやってみればいい。そのくらのことはちゃあんと知ってるぞ。ええと、八に三をかけると、これは三十二だ。それから五をひくと……ありやありや、まるっきりへんだぞ」

それからタローは大きくうなずいた。

「つまり、この答えはまちがっている。それがわかっただけ、ぼくにしては大できた。きょうはもうこれで宿題をやるのはやめにしよう。これは実にアッパレな考えだ」

こうしてタローは宿題をやめてしまった。

といって、すぐ外へ遊びにゆくわけにはいかなかった。なぜなら、おかあさんがちゃんと彼の部屋を見はっていたからだ。ぜひと勉強をしているフリだけでもしなければならぬ。そこでタローは、一冊の本をとりだした。マンガだろうか？ 西部活劇であろうか？ それとも科学冒険小説か？ いやいや、その本の表紙には、こう記してあった。

『船乗りクブクブ、キタ・モリオ著』

「クブクブだって？ へんてこな名まえだなあ」

と、タローは思った。

もつともその本はタロー自身が買ったのだった。彼は海が好きである。船が好きである。しかし、二、三度海水浴に行ったことがあるきりだし、ボートより大きい船に乗ったことはなかった。その代り、彼は、いろんな海の本を、『シンドバッドの冒険』から『海賊物語』というような本

をたくさんよんでいる。本屋で目についた『船乗りクブクブ』を中身をひらいてもみずに買ってきたのもそういうわけだったが、なによりその本がペラボーに安かったからだ。
「こんな安い本じゃ、きつとろくなこと書いてないだろうなあ」と、タローは思いながら表紙をひらいた。

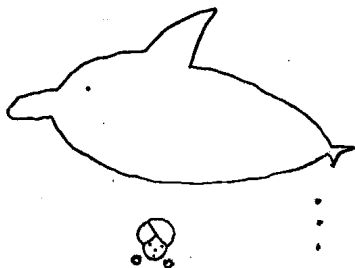
すると、最初に『まえがき』があつて、それにはこう書いてあつた。

わたくし、つまり小説家キタ・モリオは、これから船乗りクブクブの物語をかく。
よみたい人はよむがよろうし、よみたくない人はよまないがよろう。

「なんだかこのキタ・モリオって人は、勝手な人だなあ」と、タローは思った。それから、ページをめくって、本文をひらいてみると、そこにはこう書いてあつた。

いつの時代か、どこの国かは知らないが、クブクブという少年がいた。
これがつまり船乗りクブクブである。

それがいったいいつの時代であるのか、いったいどこの大陸や海洋の話であるのか、とんとわからぬ。読者はそんなことを知リたがってはいけな。作者のわたしが知らないのだから、どこのだれにきいたってわかりっこない。



「いよいよ勝手な人だなあ」と、タローは思った。
それから、次のページをめくってみると、そこにはこう書いてあった。

赤ん坊のときから、クブクブは海が好きだった。彼の家は海べにあつた。風のない日、眠たげな波のさざめきを、風の吹く日、ただけしい波のとどろきを、子守歌こもりうたにして彼は育つた。よちよち歩きができるようになるころから、波打ちぎわはクブクブの遊び場だった。いろんな海草がうちあげられ、カニやヤドカリや姿のおもしろい貝がごそごそとうごいていた。そして砂にまみれ、潮水に足をぬらしたクブクブの前には広い青い海がひろがっていた。どこまでも青くはてしなくひろがる海。そうして潮風がちいさな少年の髪をみだした。

もうすこし大きくなると、クブクブははるかな水平線をながめて、ぼんやりと立っていることが多くなった。なにかも忘れ、うっとりとしたまなざしで。水平線はわずかに丸かった。ときにはもやのためにかすんでいた。

あのむこうにはなにがあるのだろう。この広い海のはてにはどんな世界があるのだろう。そ

してまた、そのまたむこうにも海はやはり広がっているのだろうか。どんな海が？ やっぱりこのように青いのだろうか？

クブクブはなにも知らないものであった。自分の遊び場である海べと、自分の家であるちいさな小屋をのぞいては、なんにも。

「なるほどなあ」とタローは思った。

「やっぱり小説家というからには、なかなかうまいところがあるなあ。これならツヅリカタにしてだせば、良の上か、ひよっとすると優をもらえるかもしれないぞ」

しかしまた思った。

「だけど小説家といえ文章をかくのが商売じゃないか。それにしてはあんまりうまくないなあ。きっと三文作家というやつかもしれないぞ」

それからタローは次のページをめくった。そしてビックリした。そこにはなんにも書いてなかったからだ。次のページも、またその次も、ただの一つの活字もないまっ白な紙にすぎなかった。これはいったいどうしたわけなのだ？

タローはいっしょうけんめい本をめくってみた。しかしどのページもどのページもまっ白なのだ。なんにも書いてない。これではノートとかわりがない。なんという本なのだろう。この『船乗りクブクブ』という本は！

事情をうちあげれば、この本の著者、つまりキタ・モリオ氏がそれしか原稿をけなかつたのである。それ以上かく気がなくなつてしまつたのだ。

キタ・モリオ氏はとびきりのナマケモノであつた。朝はなかなか起きない。寢床が好きなのである。あまりおそ起きをするので、起きてからもボウツとしている。日がくれると、電灯をつけるのはもつたないといつて、すぐさま寝てしまう。これでは原稿などかけるはずがない。

もうひとつ困つたことに、キタ・モリオ氏にこの本をかくことを命じた編集者が、オツカナイ人なのであつた。ひげがはえていて、力も強そうで、おまけに短気者ときているのだ。

「いいですか」と、彼はいつた。「あなたはこの本を今月じゅうにかくと約束した。あなたは頭がわるいから念のためにいつておきますが、今月というのとあと三日ですよ。三日という、あなたは頭がバカだから教えてあげますが、二十四時間の三倍、つまり七十二時間ですよ。七十二時間という、あなたは頭がヘンだから計算してあげますが、これを分でいうと、ええと四六が二十四、六七が四十二、えい、そんなことはどうでもいい、とにかくあと三日たつたらわたしはここにやつてきて原稿をいただきますからね」

かわいそうなキタ・モリオ氏は努力をした。それはうけあつてもいい。彼は朝早くから起きた。しかし目がくらんでなにも書けなかつた。彼は夜になつても眠らなかつた。マブタがたるんでくると、マツチ棒でつつかい棒をした。

そのうちとても眠くなつてマブタはますます重くなり、マツチ棒がパチンと折れると、彼は新

しいマッチ棒でつかい棒をこしらえた。彼は百十三本のマッチ棒を使用した、ただ目をひらいているだけで、一字だってかけはしなかった。

いよいよあと一日と期日が迫ったとき、キタ・モリオ氏は家売りはらって、別な場所に引越してしまった。あのおそろしい編集者がこわかったからだ。期日になって編集者がやってきてみると、家はモヌケのからだだった。

しかし編集者は交番へ行き、区役所へゆき、キタ・モリオ氏の新しい住居をしらべあげた。彼はカンカンになっていた。キタ・モリオ氏の新しい家はたいへん遠かった、編集者はまず電話をかけようとした。しかし当の相手の家には電話なんぞついていなかった。編集者は電報をうとうとした。ところが当の相手の家には番地さえついていなかった。

編集者は烈火のごとくおこった。彼はタクシーをよとい、メーターがどんどんあがるのもかまわず、けしからん小説家をつかまえようとやってきた。

ところが、彼がやってきてみると、その家はまたしてもからっぽだった。キタ・モリオ氏は編集者のやってくることを第六感で感じとり、カバンにシャツとパンツと歯ブラシ一本と、そのほか目についたガラクタをつめると、どこへともしれず姿を消してしまっただけである。ただ、家の中に、一枚の紙が残っていて、それには『船乗りクブクブ』の『あとがき』だけが書いてあった。こうして、『船乗りクブクブ』は大部分白紙の本となってしまうたわけなのだ。

さて、そういう事情を知らないタローは、なんにもかいてない本をあきれてめくっていったが、

一番おしまい「『あとがき』」というのがのっているのを発見した。それにはこう書かれてあった。

『船乗りクブクブ』はこれでおしまいである。なぜなら、わたしがこれ以上かかないからだ。したがってこの本は、本文が二ページ、「まえがき」と「あとがき」をいれて、合計四ページしかない。それでは本にならぬので二百四十四ページの白紙をいれることにした。読者はこれをノート代りに使つてよい。フクちゃんクリちゃんや鉄腕アトム絵をかいてもよからうし、わたしの代りに、船乗りクブクブの物語を書いてくれれば、一番つごうがよい。

この本はノートとしての価値しかないから、定価ははなはだ安い。したがって印税もタダ同然である。わたしは目下逃走中であるが、このふんではうえ死にしないともかぎらない。さらば読者よ、ふたたびまみえることは期しがたい。さよなら、バイバイよ。

これを読みおわって、タローは今度こそ本当にあきれてしまった。

「このキタ・モリオって人は、まったくひどいやつだなあ」

タローはフンガイして本をとじた。

と、そのときふしぎなことが起った。

はじめ、タローはメマイのようなものを感じた。頭のうしろがグルグルとまわり、からだグツともちあげられるような気がした。それから気がとおくなり、ただ、自分が空中をおそろしい

速きでとんでゆくな、とかすかに感じた。

どのくらいの時間がたったかはわからない。

皮膚がじりじりとあつい。耳に波の音がきこえた。タローは目をひらき、思わず声をあげそうになった。

ここは部屋の中ではない。焼けるようにあつい砂の上に彼は倒れていた。頭の上にはまっさおにポスター・カラーをぬりたくったような空がひろがり、太陽がキラキラと輝いていた。また波の音がした。タローはからだをおこして、すぐ前に波がくだけて白くあわだつを見た。

ここは海岸なのだ。どこか見知らぬ海岸なのだ。白い砂浜。どこまでもはてしなくひろがる青い海。

「こりやまたどうしたわけなんだ？」とタローは思った。

「それにしても暑いなあ。こりやどうも熱帯地方らしいぞ」

タローは立ちあがって、からだについている砂をはらおうとした。すると、どうも身なりがへんなのだ。彼はさっきまでたしかセーターを着て宿題をやっていたはずだった。

ところが、いまは、なんだかうすぎたない白い服をきている。服というよりボロきれをからだにぐるぐる巻いているといったほうがいい。頭に手をやると、これもターバンみたいな布がまいてある。足は——くつ下さえなかった。まったくのハダシなのだ。足の裏があつい砂をふんでやるようだった。

「ははあ、ぼくは夢を見てるんだな」と、タローは思った。

「きつと、あんなヘンな本をよんだから、夢をみてるんだ」

夢というものはほんとうに奇妙なものだ。いったいどうして夢なんか見るのか、諸君も大きくなったら研究してみるといい。小さい子どもの夢はわりと単純だ。パイナップルを食べたいと思うとパイナップルの夢をみたりする。ところが、いざそれを食べようとすると、急にパイナップルが大きくなって、おまけに口まであけて、逆に人間が食べられてしまったりする。ほんとうに夢というものは奇妙なものだ。

「夢ならどうせすぐさめるだろう」と、タローは思ったが、またこうも思った。

「すぐさめなくったっていいや。ここが熱帯地方なら、どこかにバナナぐらいありそうだぞ。せめて夢のなかでも、好きなだけバナナを食べてみたいなあ」

しかし、バナナなんて見つからなかった。一面の砂浜と、海と、岩ばかりである。近くには人家さえないらしい。

一匹のカニが足元にはいよってきた。タローがつかまえようとして手をのぼすと、カニはすばやく走って穴の中に逃げこんでしまった。カニは横に走るものである。それなのにこのカニは縦に走った。

「こいつめ」と、タローは思った。「ヘンチクリンなカニめ。どうしてもつかまえてやるぞ」

そして指先を穴の中にさし入れると、カニはハサミでイヤというほどタローの指先をはさんだ。

「アッチッチ」

タローはあわてて指をひっこめて痛そうにしゃぶって見たが、ふとこういうことに思いあたった。

「おかしいなあ。夢なら、こんな痛い目にあつたなら、たいてい目がさめるものだがなあ」
すると、頭の上で、ふといドラ声がひびきわたった。

「夢ではないぞ」

タローはビックリして顔をあげた。目の前に、がっしりした大男が立っている。赤銅色しゃくどういろに日やけして、まんまるい目をして、頭はハチにさされたようにデコボコしている。なんだか異様な大男だ。

「おじさんは、だれです？」と、タローはおそるおそるたずねた。

「船乗リヌボー」と、大男はドラ声でこたえた。「さあ行こう、クブクブ」

「え、なんですって？」

「もう船がでる時刻なんだ、クブクブ」

「クブクブって」と、タローは口ごもった。

「ぼくはタローですよ。クブクブなんて知りませんよ」

「おまえはクブクブじゃ」と、大男はわれがねのような大声でいった。「そうきまっているんだ」
「だって……」と、タローはおろおろと口ごもった。「ここはいったいどこですか、インドです